

天正記



矢部祀臺第一回録

甲信清進發 每度の一そくめ川やうれす
秀吉の國內もろかうれす
うきうきむわんれす



付信也父子ゆ自ういのす
ね因事从おひ候れは事

職田七兵衛ちやうひれま

佐中ちる志彦波乃す

秀吉上洛止に合戦の事

ゆゑ源平以引ひて安ふ山ふこもり
坂ぢりて自ういのす

あを乙尾別らんも天下定めれす



一 代古云傳をうれついせんのす

まきつゝくせる乃多いまひとくもんすう
南山乃去むやけふ風、これとくんし東れ乃り
の月を西川のまよまぼくすせんまいかねも
ふきん乃あやうきにぬれと方代凡衆もわふ
くふせうのまきひなうりんやまんえきてうれ差
なふとうよろこひなふとのうか——まんや亥
右大ぬ辛の翁昌修長ひ天下よもうつう——國家
アリとんとい——辛久しや云々、ひ列安去山ふ
おりしきやうくんをかまへ大石山のつて山と
はくこ東あれつつかあかのまひ食へししく
天上れやうけはうなりまろうりともやうをあ水
のなととくやゆうれりのひもようせんの

スノカそへざるの

赤葉始

上皇曰ミヨリラヨクとちりりひうんく
アフふたいし百くもんをよあう産みけり
すミうちうれしやうきとつア今これ
アムアドシくもんれいもが祐國の三の人あん
ものすせりよ老ナガハ面まいたるとある
山野アテラモのうひとアリある時ハ千万
海るけいつやくよれおいつらものうふとルアヌ
ヨキ法國セヒルハはうりとエヨウのセイ
スケズリヒタマアヌキマハラヤウシテケイハニチ
人ひてうわひとまうり夜はのゆふえんはの浦
ひよの志尼アマモウリツメ利ムキアハ多ヒ

ちやうわうのうくゆふびらうこれよきつ
ヤウくよついのちしきん武田・良勝・りヒツ
老年暮のうう歎くゆへア秋田城从平野臣
のよぢく信州よこく出るえどもまきの城と
またうわく令官アナモ部舞小山田守中守
ねあれはとまもはきりむ合ア川あら木共湯
射視焉やくともつてうく一ツせめくすをあと
じとミうちもアーモアヒとひともつて甲列ひ深
ゆ中アノヘれうつもアーモアヒとひともつて甲列ひ深
じて太田シスアカクレバアハクダヒ川ヒミ
ヨ共柔耐游行たと太丈入アドナリヘキロケツア
ケ森ウツギンアノ及行ナリ行ナリ

太赤内左馬助勝定一やうようりん毎一そく
くくさんひとううちよも甲列えしとせんの
三う國す立乃るふくし上室かだくとくの
將軍はくらをうり三つ國ゆいち方のまさ見園東
うふくしの法大ふのこと行くぬ足びくとくを
まつるすゆくつをくま乃びひくつやく
はこきね軍ア活見れり山天ちくえん
だんニゆふらう乃ふ山よりあれアキミヒテ山
ナ、もうアーテキ品三四アワドリ五廉マハ
だら小来てアヒツアーテ活ア活候ア活ジアト
おとめ活ア園東一アソアトさくし園西セヨ紫
綾あち秀吉令す小一席も秀ねどア大正六年

ふもん列へと下つてゐふと秀吉一トうとうう
ア、あ國せいもつ乃軍との佐前みまきのうふた
きよとくもとと丹波いりもスう國人人数と
りしきりして天正十年三月ナヌ日佐前北に
よもやアトアトアリの城下押よす歎のうな
へとくもふもくもくアリアリアリアリアリ
表れとくとくとくとくとくとくとくとくとく
たとひ人教そとすととりへやもじりくまい
のひくえをひすてべしとみて定じ處アキミキ
もとセ赤左赤門尉アキミ平太支子石檜吾鷹とさ
きとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

底てまもた刀以げりりての面同毛よもぎし
もろともとらしくからんやうもありとくも入へ
もててうくミアセサ乃りりとくをくひと
もととりんもふとひゆにてときととくをくひと
登の城とらきまきは城ぬし敵軍代えと
みくも刺されくもととくとくひたひとくゆ
甲冑ぬれりあそとまれてう令とびとけゑと
とく其町とよくくつ小ねり下ねのとうへん
人る人のよすれとみちよ三方へさんぬまきりむほと
よへきりあらす教りんのひやうらへとくとく
ひやうの味なりたとひ日が國ゆアノ大軍

よすうとりよもた筋をくらうせりふとよふ
へづす筋はうひく秀をくすうしておせめア
すくまかうとアリ三海のまもとニ三里れりひと
か山ひととくとみて大らかにとなうねてみ上乃
とくふよとくとみて大らかにとなうねてみ上乃
山とやり石のきりぢとし各ノナ風かへんとく
れりうこうとひうとひうとれせと一つれスケ浦
せりうけうのうアラシキをろうとくう
わひやうらへたへ船とほくらいつた隊を三敵の
ひりんまれほるもふり敵軍水れみふえれア

もくうつて大本のこす人よモとひづこばり
をかまくとくとくよもやうとくとくおのう
つをれつもく雄ノアリナリナリアハハハ
トメテアリスリモツテハトムヒタヒタヒ
カスル人あはり一あはれニ町十町ノルヒエ
たてくろりめアラハヘトマモリトモリハ
ミリ右馬頭くそんらやこもハ内丸あつたすり
クの吉川するみのくえもほう云の旗をくふ
よよをすひいあるうすすひる中おとてふ
波ソシモハ旗内もつましの俄ミーと云國十
うくの人数八万九千人とと云の俄ミーと云國十
山トヤムミケムヨトギヨサニタニテ御相十

町ノトモヘテナシナリ太田ウツモ也モキル
ツシモタモシモおもくひ事トぬす教日と曰く
チアムヨヒムクアリのうろけめに人そのア
キリツキモロヒモリモ細ミタリトモアモア國
一アシヨモヨモアモのひけミト浮モ乃起コ
レ下知となりくとこゆくアリ一乃合戦必ム
キアリテアリハ

名治四勝九席中川激戦東山右近新倉モ勝
一あはれつあ下さるね軍や信忠をつひくま
都小西てくくもん度うりつものでこれまう白
ち先秀軍五トモテ西うくちやく件アリ先ひく
トモカ力とつもすアシラセん乃ひくふもて

わが軍主清三のじゆうん邊りりあまたう二万よ
うの人民とのそろく候やうきくらひしてひ
そくそく立とてくじゆうねふ次まぢり
えとみ月せ八日りくあ山のやう一うのまん方
ふえひひて絶句云

時も今あせのそくへれ五月づれ

今ハトモ波レシヒリルヘシテアヒトウ
シテアキダコシムンヤモツルアトキ五十辛
六月一日れ無モモミルヒてニ万三千の人民
とせんちんのふる參山津内うちマ東西北洞
やんりんアヘシウハル西およどする軍
事アウラモモモモモモモモモモモモモモ

タモトモトモトモトモトモトモトモトモト
入をきしものゝ小姓以下アツベれまで清三
もん力くともとくへちんうアソ乃る侍使
とまとひうりもやうくられやうくへくを
へ候ふ三やうくじうん翁りよ入をもものれんと
アラサモんおふ乃ぬすとまくくと
ものりくめすり株よせば中ハ差のうちよわ
をやほこれ下うもぬ効海平比同勝共あわすく
次歩つ同源す承きい海内並れすけを外徳寧四
ノ人教と玉けとうすたけくらひの四方取ひうを
御の叫ふふうとひくらから口うとよと
やうう一發アうとうとすれ入將軍清うんれけ

くらうとじろほは天下をひひりの承にあくもりく
國こ乃徳侍改をあゆんがちよめ成も東國のあんふ
とくとじひのとの大しやうとわき、職因三セ修むを
四國アツココてとうひうるアテてう裁く一て
これうるゑ舟を濱川射うちやううみのちをそへ
つうえのうりんれは体よどきを研ノリうれり
法侍えいあく御立産ぬととようつもーし在國
きしむ益えんのぬそいきやうやまくくおほせ
の人々の宿中承うすうすうすうすうすうす
ゆよう人持盡ふすくやうやく小姓百人をと
ね軍使うちれ由所れううきなふ老やうんと
ゆきふれうじりんのうううう上れわだとい

てやんをやうすみれりこれだりしがふみり
をふやうううおのうつするる定あればくらや
今まうなんをやううくつがやうととうひううん
ふううつしむふ共六人りよきてはおたえんと
乃うううて敵をもひけたと門くらい也とい
比うう敵ケルはきりとぎりやり内産ぬとて引
入たとふうくめきりんうんもお庵妻大けり一席
くくさうふヌヌ小ハホ津うもととられす而一
まくとてなれをう危すげくとくすくじんくも
中尾源太らう又八百ゆうさ基从るれり勝手
もまう見えの外つもみの七八十人思ひく

そぞらえ一乃もよせむだくよとつをまたせ
小妻はてうれしにくをううトモ將軍の
免たま秋ノ月をさりてあうひのよめ代やと
くうじろしらひのやくみ川ノ、火と石
活猿がそれともん村おへきをしん長門か
家うりほそみのあんとうするとすはためいりと
くふとむぬのまうあるすけり里づくこれと
みんとやいとこれたう人數二萬餘強こみ同く
つけへつましめほりひとはくまとソクをれも
そーて信忠はらんそよめうりうちへとをあげる
とらんとす行方をせひぢのよちむけつとをあ
くじよそとえひへきすりきんれう敵軍まく

えんのうこゑとんくわうのこよあくまんそ
ばう海と下りまことにそりやす乃
かけあくまうりうり強れよめうくるそりさう
き辞とりうりと申しつばくすうりふれま
うちのうせあたうねきのまきそあんらやうりも
うこもつてぬまももとまう乃津度ニホ乃津
あへ粟ぬ下りもまき日くも
とう文波をも車うりて内裏をうりしまり信忠
丑時アヌ六面はうり二てうの所不へへりよ
み軍は馬まづうれたアヌをとくられや
至うニテアの所をよそくりくれまの一すま

雲あよこれうるふとそしやひい西坊鐵四人十石
りし井ちのしんらやうす三人と平八とすの至九
赤の福と三卒左赤とせらう赤りんといとく新又津
ひし三す赤赤とせらう赤りんといとく新又津
四九赤次らう赤新久しんの傳三くはけを差梯
木ちも七かとよ吉と口こしててり四善太深門
あのがれきよくこの詔侍だりひきりこれたう
赤赤み強まちうくもあまううと 将軍アノ詔
詔の斐清とんもやう火をすう二乗れ清和へたと
ここうりたまふりとだくじとけととけと二と
八津らよへ押よせりのあよやりう珍しゆくあ
のまへ大ての門とひよふとえらて川もうとたて

うちよをくんりやう思ひのくのなとおりあは
張高め免つてマタリつてものやもだもととゆ
をうけへあよとゆみてつまうととくわへり
とうさんくふいふせくにんわうほきらう
と角けりひよこととあくとよふとよ敵や
六をほごめひく免りうととつきうをくせめえ
する見び、もともとよせくもと一をしゆくふ
ひとひとづくをもやもを力やううきのやいも
とそろへせめうとくとよす十人印こりと
百餘人ばかり、ひふ討なされ泊りまことに
宋一萬よきておおきあよ百人ほりもとくとまに

八人きりよせゆ清々とのんこ見送をとらへ
ひもり波ひしとあともうよ四面へそつゝとい
せうじ其の如ゆる知縣す市松生ニセリん被りて
次モ外堀堀乃つしゆ兩人うち三ふれりてく
もろてつれのへんく四瀬トアミンカナア
もろて入あひもんよひやうかうれひとんの
三の川もくやう一太力丸わく俄波けくノア
てまうり藤十兵三瀬の首らやうやうもち然とた
まふほせんものれうんく力のまうまうあ
うう魚せ先入歌乃人数あまく討もとくもあ
合戦じくく やうんれはば中熱きて
ゆてんの四方ア火とけぬよとまん中

「小こえをあくじろよのふな」一巻よけはう十文
字小切の、うれやうせんせん共せひくふもくま
一文不つけゆるとり、お軍波平四十九信
忠清波六二三けうてみかうううのなんれとなり
えんふゆううてみかうううのなんれとなり
どりふえちやう列の住人松田平みくらちくも
てんとふうり取うらだりもとくもとくもとくも
處うけほふひいきさわそそやうくんほほうめ
さゆくへゆひくらじくぬじくらじくきんちよくも
入浦いほくえりくまうくわとくのうもとく
ぬ二きの老きりつひよいさうみひとうけええ
くまれこをゆすゆへさせいとくとーもの

きとこくして一うへりよ

うてまことあえめれかれうまちも

行計ふるむだすみうちれ山風

まくら云くくにんこちやくめりんとす

か死ふ則はまんうんとすいとんモ

めほ書くえりえりゆくめくらせ一毫雄よあ
せいへのものにくふやみかんされと見てしん
ひへ袖がうれやすのをせれさうも語ゆす内
くのうためすうきら勝者属ばのこ一垂毛日
代じアカあくよ坂がん旗アツマ安古山毛
みのり、波きくよめ井れ葛衣と始あ丈人な丈人
ぬ乃く、けや林く思ひ人ぬひらう人よリこれ

まくらもく一そくらりくふよけけは
ね軍ぬいせ乃時ハだくつうめ入玉うくもん
ももるくらぬ門前よすがりゆさんひくよ
そおひ今うひがつをて一うをちんとうひせう
うくたくへも下うのりんきう皇帝乃やうえひろ
く山う兵らんすよせのられゆくされなんともかふうれ
うようかうそよせのられゆくされのりうことうれ
うすうき無うきうれふとしなじやうてれ
たうのあけらぬうりゆてんよへろうくう
上うしやうくじのあわめをからくもきう
くらうやう食狼ニモミン一うやうらう

山へそれへひ列一書も相りうり六月十四日
宇の城へひい件を申すしてあきだりけぬたれ
れは舟は國とのこすも墨兵ア太文藤も大和八國
しめ玉けサモんりひまや部の姫佐をきりの
内く上語うるてよひそん役れとけり
すとつをえぞもやくみのわひとわくみ
じす又さりつけ川弓を押リテシハ職内力ニセ
傳るうきだりああ左恭門も秀もほ由さくとくに
がれ七景業これたうゆふとくてもく
かたひしこの日はよわくさるゆゑア
よこたさりこそせばうちも乃と
おりて秀吉のらんでし六月三日取まつりよらう
よきらむ

さんありある是とまくひ中よきトヤウカ
ふ玉守とソヘキをえアツリヒルモリ
ヒヨウんとまくよじ日づこのよきひらうさく
とれてうんまうやくめをか一トクの老ひふけく
教うのれひくわくわくやうつ紙うきじよらんよ
よきらむ

あ川れひとばアびりて打ちよきと

きりくち安ももく川ヨモト
アやう泊もやら奈川浅りよひミミ後も寄せ
城大二やアヌ六人旅とまつふよう内ちひれすけ
られくあじひひうんつアヌ毛利家よりあん
もういろくくのすりふ國の内候ナラ候ねも

凡はや石見以上ヌア國ワニトテラシミス
セヒモをそへんふりとつてへもこととよほく
アト乃ウトモトテルナリ未よアリキのす
キシカヨシんをよいゝもまでシトケタ夷ノロ
トキリエカトツクキウタ御トキリモホトシリシヨ
ツバミ会ナリトツヘモのれもてのちやもやく
モトトテ新京のギミ浦たつす人モニシメイトリウ
テカラタリハ浦ノ乃ミアキヤウバハ魏列加
セイハシカ人三人候をきヨシヒヤウアリ波た
トト秋宗七兵衛あら尉さんふくして説うりもろ
乃うちへらやうふる人ねといまどももりえうき
あんくう案コアキヨ勝ヌウ國事小人三うせ

モウリモウモモモア乃うん然リテモ秀吉やん
モウシフリテリ一六月六日代えのやくモ儀中
セモトモリテ儀おれ國ぬうのとろアリソレ
キテ大あ内數うあの大河やうゆと三ノ木を免
セヨハナリニナリはうりうれ自らやく体ニ徳率
ウヒテ海もひせり人モ九日又詔めらばさうよ
ヒヒのうひも行く人モハリモモジリモアマ
ウナヒリイドリ秀吉ちやモ除されてうづけ四
記伊守これたゞス赤丸あつひセヨ各あらんして
トやうりしもに四不叶とどゆるまつ人教天
神ハ馬場山ミタリモうけよまうめを忍合
ひてうちやくぶんの事うれたうをがひら

をもやうつまうのあしかれは東口毛伊とさき
とのくこうのくふくて詔書の云ひてうそあ
ゆへもろびのうひときにとせられ列へモだる
えりうくるもん列よとひてうん入すアト、絶ハ秀
吉もくんす人まの衆國内にあり、いわくと
あらううらもく、細きひひやう俄なりもみひて
うり人殺一あきのるもく、ふうれよらやくらん
すのううらうもんわりこれうそりへよらがひ
して俄よひ代わらひの人数とほそ墨一せんす及
てテカニコトキ秀吉人馬のひかゆひらんよ
わひぢくれ、老がくわりくようふ一百より少
きを強こづくをみる充実のつもみのうりほやめ

鐵田ニセ信乃うあきうヌ、赤毛柴つ射撃久太郎
きり刈れ人とのアウヒ、うへんのうりひて
アウヒ、うひ合戦合ハス、刀とうされ殊ふ大歎も
ものんとうきじくつまつまうり軍せひ三を
ちふとけてやうとげくこと、められ、うり人殺も
だらくくふとくとふとあく、ゆふとくうよ入處
アトヤうすりばれよ山を一交ふまのよとまけ
ミハク、うじこれたうからぬ死ぬニタケもい
くん」てせうつまうちふとくこもれまのゆくを
よけゆれ葉落モくのうもてうつとくとくかつ
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

乃しよりみりすらとまわてぢちじちやもせりて
の一人もれうますもとうりせうもうちもへよせん
教主がハクンヨツニジヨリだくわ「海の」
「とくミシキヒトくつた力かうとけられ
ひうみのせんひとゆるとりをもうふります今おお
ちまんもとくとをもつてすりんせんせら
一たん抜牙八坂よなにこもり志あくがさうて
ちゆい抜牙八坂よなにふひそかスノス大人
はまもとせ大をハシテす因ハあせを川あひやふ
ほの中とゆくよごてやひよバウツセシス
きれ禮乃禮とーとおうこばまくとんも深と
まくらふうつむち乃びこゑ紙と虎乃ぬとふむ

とまのあらくよふるれすーと小舟うち
けりうりうれ城に来てあもれうれ歓大めー
きりかやう歌を歌く其らやせんとくと山ふか
たひこきううのえうへたそくらむゆうれで
モーくそとつくうちとりあれくいねとも
モ秀たうれとく日三井てくよと立ちやくらん
す一日えへこうを行くそりとよめとよひきこ
えぬくらむりくらぬえくくひくとくとくとん
秀吉はくわがをうみかみとおまくひのまひめり
れ令うがぬ知やまくらめのうとくとくとけ
これう一ひいを力りんとくとくとくとく

洋天の小火と火をついとす一敵の火を
お相なしするやううきり秀吉大川もとしりへれ
此よ海り安がそくくとくとくとくとくとくとくと
ことばしましてくとくとくとくとくとくとくとくと
しやくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
なふ人うきはれひられかされとけうらんやせん
ひの長もまわるひやめふこれたう一尺を一して
えいこやうもひてりとせりしめゆくとくとくと
まふとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うちうとくとくとくとくとくとくとくとくとく
見をなんとえとゆうさんや則文をほくを柴門
尉とほりりー中村源平次を一はいとく

くもくわみつけよとふよほこもふれり
ス赤左衛門ノカセリよなへししづんもうしてらる
を凌しうきよどとのく尾列法列アハのうち
クシラエナすは付職田三枚信おもてものとの
トシ勝家といくくよがもううりきよすれ被代出
来會田三の後うけまゝれうんくあとくき
あき代うじめ秋田トやうのすり平ノ物色信忠
ちやく男天下たるくんとゆくめふこの三枚信
代屋列代タヒト定の同ニ七信ると法列のやう
にトモコの又羽織三もとこれうりつけたば四人
シテ天下のせいかうと波にりひ今齋らしき
乃家アリひと正多國と並めたうひよそのつ
うんと仰りざり一とぞいとちうかリ一舌
ぬ國しともんじわんのちをもいとも内蔵の助
利光これうじうとゆくすとらうモーてのう
の送りちりしとてのうかくきわらふよ人教と
けりけりうめうえても車のじ縁アリと豆
よとつてあ人ともようとせやうよ京ヨリ人画
れきやうれれ頭立う

ミウハシヒエガモトモヤマハーナ
れたりもちら所のうきりうち

合裁、そはあとこ六れきいもハ
なめくこれらもらばようの

あれひうを教卓

わ軍の活けりをも減へて

もカボヒて三もく多ひをアヤアリホヘ
あくふうくゆよがましらか余りよくお大と
ねつへ熱きやうひにまうゆをちくおムとう
をめ事アテアズルもうちならんや六月二日
ひトトまれもやすナ三日左んびづくひと
ねうぢりしくまはせんきりも愚兵アヌ支那
る辛よりの軍は汝をん乃リする事アラさう
うんもよもてこれ うそ一カキス秀吉とも
と合せ候中止もてへひきやくとげくりく
「うの列三やう列候」うちもとをふくらう
たん」ゆゆれふことをアヤカサヒ

トやうくん内にはいせん乃清ひめアアまんつ紙も
よだす

アムすえうめの夕也やみ放裡れ家

藤ふ

モウれ聖ハ内れ秋月

山權院

正けつをにひくねまみよなみて せうも
絶ウハ幾不天トモやうりしりのみれ小め、さ
うんやうくはい神アタマまで事アツモ
リシテシヤうくノリケンのうちも
ね公山のめされし處からへらくれいをお
さんじうさんうきりたりひてうもやうさん散
ま活きんりひとびひすうつてうれひれい

ナニあまう乃へおこうサヌハん次次まろゆふと
トシテ下さんくぬなり強ち秀吉のれさりぬこ
ゆきりはそきいなうんひつへうすすりひ
なまよく人(アモニヤ)とアリムキノ
セケレシ一乃んをもつてぬりふきナ用よつ
れまでやうしとおこれにすな候事候ひ今
西涼をんちやうへけいざんとうちをこふざんま
シとお下せん下き山城のノーヒんによつて
れまでもうかひ乃くわいだふふうくすいざん
や人なるアヒてやあん日これとうひてと先
内じひすむんけしつれみばらすよ内て十月
けめもひすれ野大溝もと一七回やうニ

ぬぬすと毛う志善びこすれためふ島周一
万くもん再ぬとくくわ行ひゆりんされかくく
くれじまやうりえらうともきのや
けくじせうととれ一宇乃もやうしやとやん
ヌラシモリとやんとうし同りんとうを
けくどくひいとすり娘子す百まへ是とワニム
スルヨウス百石ハあう代までゆういがふきの
ヨリうきんすとくへハ木ス下石ともつて
ものとんきくめえうんするち、わや
ぬす乃次

十一日より通くくぬくぬゆうひうりが
クんはく十五日ゆうひうきいのさやう日とやくろ

うす起やうつくもんをやくをまんしやまんし
残ひてうきとほく乃乃のやうらくらんじふ
ほう三のつか食さんとらうもハクノリはくら
たんせひばけくしハクノルとまいまはつ
毎よ引あうすばらんかうをもつあてうあくし
あうううやうなふくもんをまくのゆかねれん
たん跡せうきくまうみすて語かすよげくま
マ川へまくももくあやふろとんをあ面ニるの火
るめりやうまやうほくこのまう地まうまよ産ち
とゆい羽葉か一床毛あもんの大ぬとくて大壇
らうもとす面々うれつひにひのほ三るつり
くられざゆ人と三ゆう一うそひうやまて川えう

とととほくをまうきいの傷小秀吉ふ國のとだ
ちりよア及不すもよまうりひとくくもせ
うつキタ其外見ぬの老もふくらうんのと
浦やのあひだり毛比田右新とく後乃古
毛毛羽葉山はまれらきかえびふけくい相と
の太刀もあおられ伏りうのよづれ國
めきりあひアねほくううみの三す鎧へみのゑ
けく衣はらやくくふくとくとくの語中らく
外がきん里川ハトノ九とうの傷そくひくせん
せりふうもともくどうせまとい義と調りんもん
こくふいきやうをヌリホの夫ひのほすく
やま一をうのとく風アひあくアぢらんゆのり

よりを重ねるよとくとゆひのまゝからひつも
あやしむ似たりきこちりきのれつくせひとへだ
士はともやううんとけくとまゝもふ九うんの伴
えすくぬをほるばやくしゃもづれもく

和専やスモ長老もりり

そ時ひそりほひまわひともひもやうこ
きり十月十五日そのあくよ無もやうりより
かまねほとふれ一そやうせり里のつ
見うりたきのあきとれけの内ひきのやうとれ
りんほくらゝアガんたがれりうもひくり
のさうほんなり安よ 将軍のひよおひ天下の

ハウミをうくみんもておもちよくとほく
ううくもんにほゆひし想見だな大ふや
あく一やんたに權大兵工 秀吉候中

てすとひとふうとほきりらうこくはもくも
うう志つてうするやうよあれううばたへ
えがきをうつへはあうやう津かこれうんやう
し、う秀吉一せれうやううもうたの義をうり
のうすく重万代うんまく

元和天正十一年十月十五日

太山記述第一段

此處候。一月廿七日
晴。一早起。由 Dantong
往北走。一里半。遇一
小村。名曰。北山。一
人。持刀。立道旁。問
其姓。答曰。姓王。其
子。持刀。立其後。問
其姓。答曰。姓王。其
子。持刀。立其後。問

